

福祉社会と心理学

中瀬 惇 上田 和夫

京都府立大学 心理学研究室
〒606-8522 京都市左京区下鴨半木町

目次

1. 序論	4
1-1 心理学の枠組み	4
1-2 心理学の直面する科学と偏見	5
1-3 心理学の中の疑似科学	6
1-4 基礎科学と応用科学	6
2. 心理学におけるヒトの見方	7
2-1 科学の要件	7
2-2 科学の対象	7
2-3 科学としての心理学	9
3. 心理学的研究の 4 段階	10
3-1 記述	10
3-2 予測	11
3-3 統制	13
3-4 説明	13
4. 心理学の研究方法与科学性	13
4-1 調査	13
4-2 事例研究	14
4-3 自然観察	15
4-4 実験	15
5. 心理測定と心理検査	16
5-1 心理測定	16

5-2 心理検査	16
6. 社会福祉と心理学	17
6-1 心理判定員	17
6-2 心理検査の使用倫理	17
6-3 臨床心理学	18
6-4 宗教と科学	18
7. 将来の福祉社会のために	18
読書指針	19
文献	19

執筆担当：1., 5.-7., 中瀬
2.-4., 上田
ただし 2-3 と 4-1 は両者の共同執筆

1. 序論

人類の未来には、核戦争による人類の破局が心配されている一方では、世界の平和と協調を基礎として、人類の合理的理性を集約した未来社会の理想像も描かれている。人類の未来を占うような内容は、この章に課せられた主題ではない。ここでは、人類が獲得する未来社会を福祉社会と規定した上で、心理学的方法を解説することにより、その中で心理学が果たすことの出来る役割について述べることにする。ここで述べる福祉社会とはどのようなものであろうか。その詳細については、他の章で縷々論じられてきたはずであるから、ここでは、人類の理性と英知によって築き上げられるであろう理想的な未来社会を福祉社会と規定しておく。なぜなら、そのような理想的な未来の社会では、人間の幸福についても十分に満たされた社会であるはずだと考えるからである。

福祉社会を構築していくためには、経済的基盤、社会の制度を形作る政治や法体系、社会施策等がその最も重要な基盤を与えてくれるであろう。そのために必要な諸学として、本学では経済学・法学・社会学などが位置づけられている。それでは、心理学の位置づけは如何なるものであろうか。科学としての心理学は、未来社会を構築する枠組みを構築することに対して直接貢献するものではない。しかし、ヒトの行動法則を明らかにしようとする科学として、基礎的な資料を提出することにおいて重要な貢献が可能であると考えている。その具体的な道筋について以下に詳しく説明していこうと思う。

1-1 心理学の枠組み

心理学は、現在の福祉社会学部に置かれた諸学の中では唯一の実験科学である。その意味は、学問の方法において他の諸学とは根本的に異なった体系を持っていると言い換えても良い。そのように考えると、心理学の役割に二つの側面があることが解ると思う。一つ

は心理学という学問がもたらす成果が果たす直接的な貢献であり、もう一つは心理学の持つ実験科学の方法論が及ぼす間接的な役割である。現在の社会は、核開発技術や宇宙開発などに諸君が見るような成果を生み出した基礎となった自然科学の進歩がある。一方では、いや、自然科学の高度な進歩により、その内容に一般の人々が付いていけないような水準にまで科学が到達した結果として、科学技術はその内容をブラックボックスとして、人々は、ただその成果を享受するだけとなってきた。現代社会に生活するヒトは誰でも、科学技術の成果を拒否しては一日も生活することが出来ない一方、その内容が見えにくい科学に対する不満も高まってきたと言える。科学技術が高水準にあるが故に、現在の科学で解決できない多くの問題に直面すると、科学への不満が噴き出し、非科学的なものへの逃避が生じる。曰く、科学技術の進歩は環境破壊など人類の破滅に貢献している、現在の科学技術社会では精神生活が無視されている、科学がいくら進歩しても不治の病が多く存在している等々、その論点は、科学とそれを使用するヒトの問題を無視しているだけでなく、要するに、科学が万能でないことへの、人々の不満と考えることが出来る。しかし、この論理には、科学に対する根本的な見誤りが存在する。それは、科学の本質に関係することであるが、科学は本来万能なものではないし、万能を目指したものですらないという基本的な科学の原理である。

科学の目的は、万能性にはなく確実性にある。科学本来の力は、その効力が及ぶ範囲をきわめて限定するものであるが、その範囲内に視点を限定して考えるなら、その成果は非常に確実になると言う点に科学本来の意味がある。もう少し詳しく説明すると、いったん獲得した2都市間の移動の早さは、速まることはあっても遅くなることはないし、いったん治療方法を確立した病気についての治療はいつまでも有効である。科学の世界には後戻りが無いとも言える。

しかし、科学の成果を利用するのはあくま

でもヒトそのものであることを忘れてはならない。科学技術は、人類の未来のためにも使用できるが、当面の個人的な利欲のためだけに使用することが出来る諸刃の剣である。言い換えるなら、科学による環境破壊があるのではなく、科学の力を利用して個人的な利益を追求した人が環境破壊を引き起こしているのである。そのように考えてくると、科学的方法論を知ることには重要な意味がある。そうして、社会科学を学ぶ諸君に対しても、心理学はその良い手助けになるだろうと考える。その意味については、以下の解説により自ずから明らかになっていくだろう。

1-2 心理学の直面する科学と偏見

心理学は、言うまでもなくヒトの精神的活動をその対象とした学問である。心理学の歴史について簡単に述べると、心理学はまだ歴史の浅い学問と言える。諸君も既に良く知っているように、ヒトの精神現象を対象とする学問には古来、哲学がある。言い換えれば、ギリシャ以来ヒトの歴史の中では長年に渡って哲学者が、ヒトの精神現象を学問の対象としてきたし、文学者がその典型的な事例を表現することに努力してきた。そうして、ヒトの精神の救済は神（宗教）に任されてきた。このような歴史の中で、近代の自然科学が開花し、それまで克服することが不可能であった多くの自然現象を科学者がその手中に収めるようになったのが産業革命の原因であった。科学の飛躍的な進歩という時代的背景の中から、ヒトの精神や心を対象として自然科学の方法によって研究を進めることを目指して新しく旗揚げしたのが心理学なのである。それゆえ、心理学は19世紀に新しく作り出された科学である。具体的方法論としては、当時その最先端にあった物理学をその理想として心理学は始まった。精神現象を物理学の手法で研究するから精神物理学とも呼ばれた。その具体的な方法については、以下の章で詳しく説明する。

実験科学の中で最も多くの非科学と直面しなければならないのはまた、心理学の宿命で

もある。物理学や天文学、化学などの自然科学の世界では科学の方法論について今さら述べる必要がないかも知れない。近代人はもはや、物体の運動や化学合成をするときにお祈りをして霊の力を借りようとはしないからである。もちろん、アメリカの一部の州のように、現代でも宇宙の創世や人類の発生を近代科学の知識ではなく、聖書（旧約聖書）の記載によって教えるべきだとする運動が力を持っているところさえあるのだが。それは兎も角、心理学は非科学的な発想や研究方法が最も混入しやすい科学なのである。何故なら、心理学がヒトの精神現象、言い換えればヒトの心をその研究対象として選んだためである。ヒトの精神を扱うが故に、多くの誤解を生むことにもなったし、故無き批判を生むことにもなったのである。

そこで、実験科学の中に位置づけられた心理学の特殊性について、もう少し説明を加えておくことにする。一つは、科学の方法で研究するために作られた学問であるにもかかわらず、それを再び非科学的な解釈学に引き戻そうとする運動であり、科学であるが故に生じる、先にも述べた科学が持つその対象と能力の限界への批判でもある。難病の治療が出来ないことによって多くの民間療法や、呪術が流行し、天体の運動を支配できないことによって超能力が流行するように、現在解決することが出来ない多くの問題について非科学は発生する。このような考えの基本には、常に科学の出来ることを無視して、まだ出来ないことだけをあげつらうような議論が存在する。その中でも顕著なのは、超常現象や超能力など物理学へ、心霊療法など医学へ、さらに、全般的な心理学への疑似宗教的挑戦である。その多くの問題について、心理学者が詳しく解説した成書が刊行されているのでそれを参照して欲しい（Hines, 1988）。また、精神分析についても、イギリスの著名な臨床心理学者の優れた著作がある（Eysenck, 1985）ので、ここでは重複する内容についてそれ以上触れない。

付け加える必要があるのは次の二点である。

一つは、心理学が科学としての確実性を認められるようになってきたからこそ、その名前を詐称することによって、自分たちの怪しげな世界の信憑性を高めるために、心理学の名前を使用する人たちが増えてきたという事実であり、それ故にこそ、なかなかこのような現象は無くならないであろうことである。ただ超能力の存在を信じる人たちが、移動には新幹線や高速道路を使用し、心霊療法家が自分の病気には、近代の西洋医学の患者となる現実を見るべきであろう。迷信や非科学を追放するには、世間一般の目が肥えて、その本質を見分けられるようになるのを待つしかないとも言える。それ故にこそ、社会科学を学びその中で人を対象とする人たちは、心理学の正しい姿を理解しておくことが重要である。二つ目は、我々側からの意見を言えば、既に述べたような心理学が創設された歴史を考えれば、異なった方法論を取る人たちは、心理学の名前を使用せず、自分たち独自の新しい名前を作って、やりたいことをやるべきだということである。それが基本的な学問のルールであろう。

1-3 心理学の中の疑似科学

前節で述べた事柄は、まともな科学的知識を持ち、正常な論理的思考が出来るヒトには、説明の必要のない自明の事柄でもあろう。そのような意味において、心理学だけでなく、他の諸科学にとっても、現在最も危険なのは、一見科学の顔をした疑似科学の方にあるのかもしれない。もう少し詳しく説明するなら、例えば、他の多くの学会と同様、正規の心理学の学会発表の中にも多くの非科学や疑似科学が潜んでいる。ヒトの心理現象を、一つの事例で説明するような試みや、思いつきの粗雑なアンケート調査による研究などである。そのような研究者はしばしば、自分たちの研究が不十分なことは知っているが、十分な研究をするのは大変だから仕方がないのだというような理屈で正当化する。このような言い訳が許されるか否かは、例えば、水俣病やイタイイタイ病の原因追究や、新薬の有効性判

定にこのような論理の使用が許されるかどうかを考えると、結果は自ずから明らかであろう。所詮、心理学などは人の命に関わらないし、高額な政策決定の根拠にも使われないからという無責任さに起因すると言う他はない。

1-4 基礎科学と応用科学

心理学は、まだ歴史が浅いこともあって、その対象範囲は広く、学問領域の専門性が十分には分化していない。そのため、心理学の中には、基礎分野から応用分野までが広く混在している。心理学が、心理学以外の領域で利用されるときは、その基礎分野ではなく応用分野であり、その意味では、世間一般には心理学の応用分野の内容について知りたい人の方が多いと思われる。しかし、以下の章では、心理学の基礎分野について、それも心理学の内容そのものではなくて、心理学が確立してきた研究の考え方、研究方法について詳しく述べようと思う。以下その理由を少し説明しておこう。

応用分野について述べることは、言い換えるなら、心理学がこれまでに獲得してきた成果を述べることになる。しかし、研究の成果は、不変のものではなく、学問のその時点での到達点を示しているに過ぎない。特に心理学のように歴史の浅い、若い科学はその進歩の速度が速い。現在最新の知識であっても、10年後・20年後にその知識が正しいという保証はない。また、ある学問を理解するためには、始めに基礎的な方法について理解することが大切であると考えられる。それは、学問が進歩発展したとき、基礎理論を知っている人は、新しい事実や知識を容易に理解し自分のものとして獲得できるのに対して、応用的事実だけを知って利用している人は、新しい変化に付いていけなくなることが知られているからである。30年ほど前に、アメリカの心理学会が全国（アメリカ）の大学の心理学の先生について調べた調査がある。その結果明らかになった事実の一つは、一般的な大学の先生が使用し学生に教えている心理学の方法は、その先生が大学院で習っていた当時の

学問水準に留まっていたという事実であった。最新の事実を知ることが、単なる知識の獲得であるから、最新の成書を読めば簡単に獲得することが出来る。しかし、学問の方法を独力で書物から獲得するのは、大変難しい。

以上の事実を考えると、ここでは心理学の獲得した知識を羅列するのではなく、心理学の持っている方法について説明するのが最も適当だと考えるのである。心理学の持つ方法論は、心理学独自のものである前に、実験科学にとって共通する方法論でもあるから、社会科学を学ぼうとする人にとっても、実験科学の方法論を理解しておくことに意味があると考えられる。

2. 心理学におけるヒトの見た方

心理学が直接対象とするのは、行動 (behavior) と心的活動過程 (mental processes) である。これらは、日常われわれが「心」と呼んでいるものとはかけ離れた、せいぜいその一部でしかないもののように思われるかも知れない。それなのに、なぜ心理学は行動や心的活動過程だけを対象とするのだろうか。その理由は、科学が満たすべき要件と深く関わっている。

2-1 科学の要件

科学、特に自然科学 (natural science) の要件として次の三つがあげられる。(1) 経験主義 (empiricism)、(2) 無矛盾性 (noncontradiction)、(3) 公共客観性 (objectivity) である。

(1) の経験主義とは、単なる推測や直感に頼るのでなく、観測 (観察) 可能な経験的事実から新しい知識を得て、それを基礎に論を進めることを意味する。ここで言う経験的事実とは、一個人の私的経験では、もちろんない。あとで述べるような、公共客観性のある事実のみを指している。

(2) の無矛盾性とは、それまでに得られた知識 (法則) と新しい知識が体系内で矛盾しないことを意味する。

(3) の公共客観性とは、経験的事実を得る手続きが明白で、その事実が他者に再現できることを意味する。また、新しい知識を得ようとするときに、特定の仮説に有利にならない、すなわち公平で偏りのない (unbiased) 手続きをとることを意味する。そして事実が他者に再現できること、すなわち再現可能性 (reproducibility) は、同じ手続きを他者が繰り返したときに同じ結果が得られれば、あるいは同じ結果が出ると考えられれば、新たに得られた知識が信用に値すると判断することを意味する。

このような要件のもとに新しい知識を得、ある命題が「ほんとうかほんとうでないかということを用いる」(中谷, 1958) のが科学である。ここには研究者の好みや信念といった、価値観に類するものは含まれていないことに注意してほしい。また、そうでなくては「公共客観性」は得られない。そして、客観的であるがゆえに科学は確実に新しい知識を増やしていける。真に新しい知識を得ることが、すべての研究の基本であり、しっかりした基礎研究が本当に有用な応用研究へとつながる。経済的な面から見ても、基礎研究に十分な投資をする方が、闇雲に応用研究に投資するよりも効果が大きい (Wong, 1996)。

2-2 科学の対象

では、科学の対象にならないものとは、どのようなものだろうか。(以下の文中でアスタリスクの行は、読者にそこで一度立ち止まって考えて欲しいということを示す。)

* * *

もちろん、2-1 の要件を満たし得ない対象は、科学の対象にならない。たとえば、人が見た夢の内容を聞いて、その人自身を含めてだれも覚えていない幼児期の体験を推測し、それと本人が現在抱えている問題とを結びつけようとする (Freud, 1900) のは科学的ではない。まず、全く同じ夢を何回でも見たいと

きに必ず見られるようにするための方法が存在しないし、他人に同じ経験をさせることもできない。すなわち再現不可能である。そして、その人の夢の記述が実際の夢を正確に表現しているかどうかを調べる方法もない。さらに、その一回きりの夢からだれも覚えていない幼児期の体験を推測してみたところで、誰がその推測や解釈をするのかによって結果が変わってくるし、その推測が正しいのか間違っているのかを確かめることもできない。それゆえ、このような根拠のあやふやな推測と本人の現在の問題とをつなげるのは、小説家にとっては自由に腕を振るえる見せ場になるかも知れないが、結局のところなにも新しい知識を得たことにはならない。すなわち信用に値しない。何とでもいえるのだから。

この Freud の例は、疑似科学の典型的な例といえる。このような疑似科学の提唱者の行動には共通する特徴があり、それは次の四つである (Hines, 1988)。なお、[] 内に筆者のコメントを示してある。

- (1) 反証不可能な記述を仮説として述べる。
[本来このようなものは仮説とはいえない (3-2 参照)。]
- (2) 現象そのものを調べたがらず、きちんとした検証が可能 な場合でもそれをしない。
[検証すると自分に不都合なことが生じるからであろう。]
- (3) 立証責任をすり替え、自分では綿密な議論をしない。本来なら既存の理論に反対する側 (疑似科学の提唱者) の方が、より綿密な議論をするべきである。
[立証責任がなければ、どのような推論であろうとやり放題になって彼らに都合がよい。]
- (4) 事実が自分たちの説と一致しない場合、自説を修正するかわりに事実のほうを無視する。
[ここまで来れば、もはや言うべき言葉を失う。]

彼らはもともと反証不可能なことを主張するので、彼らの「仮説」は経験的事実とは無

関係に常に「立証」される (もちろん実際には立証されたことになっておらず、単に自分の価値観あるいは信念を主張しているだけに過ぎない)。このような疑似科学者にとって、夢のように事実が曖昧 模糊として捉えにくく、素人目には深遠な内容を持つように見え、解釈次第でいかようにも物語を作れるものは格好の題材であったに違いない。しかし現在では、夢の生起する生理的なメカニズムに対する理解 (Hobson, 1995) が深まるにつれ、Freud のような恣意的な解釈ができる余地はますます少なくなっている。夢の解釈に限らず Freud や Jung らの提唱した精神分析は疑似科学であり、心理学ではない。同様に、「自己実現」という、何を指すのかあいまいで、かつ検証不可能な概念を作り出した人間性心理学も、心理学と名乗るのは不適当な疑似科学・疑似心理学の一つである [詳しくは Eysenck (1985) および Hines (1988) を参照せよ]。

では、次にあげるものは科学研究といえるだろうか。

- (a) 大脳半球を分離する外科手術を受けた患者を用いて、左右の視野に別々の文字画像を同時に与えてその文字が表すものを左右どちらかの手の触覚によって選ばせ、左右の半球の機能の違いを調べる。
- (b) 聴覚神経の電気的活動のパターンをもとに数学的モデルをいくつか作り、ある音についてそれらのモデルの出力結果と、人間が高さを判断した結果とをつきあわせて、どのモデルが音の高さの判断結果をもっともうまく説明できるかを調べる。
- (c) 幼児が対象を注視する時間を測定し、現実には起こり得ないような映像を見せた場合と、現実的な映像を見せた場合とで注視時間に違いがあるかどうかを調べる。
- (d) ラットにサッカリン水を与え、そのあとで吐き気を催すような薬物を注射すると、以後サッカリン水を飲む量が減少

する。サッカリン 水を与えてから注射をするまでの時間と減少量との関係を調べる。

* * *

これらはいずれも科学的研究であるといえるだけでなく、心理学的研究として実際に学術雑誌に掲載されたものである [(a) Sperry (1968); (b) Hartmann and Doty (1996); (c) Baillargeon (1987a, b); (d) Garcia, Ervin, and Koelling (1966)]。

これらが科学的かつ心理学的研究であるといえるのは、調べる対象を「心」のうちで科学で扱える部分に限定しているからである。触覚による選択反応、高さの判断結果、注視時間、飲水行動などの行動を観測することは経験的事実を生み出すし、再現性があるかどうかも確かめられる。また、心的活動過程とそれを生み出す感覚神経や大脳半球など脳・神経系の活動との対応を考えることは、はっきりした実体のあるものの動作を考えることになる。すなわち、これも経験的事実を生み出すことにつながる。これが、心理学が行動や心的活動過程を対象とする理由である。

2-3 科学としての心理学

科学としての心理学は、われわれが日常ぼんやりと考えているような「心」全体を対象にすることはせずに、科学の対象になりうる部分だけを対象にする道を選んだ。それゆえ心理学を学んだからといって、日常会話で用いられる意味での「心」がすべてわかるようになるわけではない。ましてや、詩人の表現する「或る人の心の空の色」(吉野, 1992) がどんな色で、その人がどんな心の持ち主なのかを心理学者に尋ねるのはお門違いというものである。詩や小説などの文学作品が目的とするのは個人の情緒に訴えかけることであり、科学のように普遍的法則を明らかにして論理的に人を説得することではないからである。

もう少し詳しく説明しよう。科学の要件についての説明(2-1)で、科学では経験的事実を重視することを述べた。人の「心」について語るとき、この「経験」という言葉が特に

誤解されやすい。人は誰でも自分の心を持ち、自分の心の動きを自覚する(あるいは自覚したと思う)ことが可能であるため、科学でいう経験的事実と、私的経験、あるいは個人的経験とが混同されることが誤解の原因である。

たとえば、ある人が、尊敬に値する師に出会い、その学識と人格に深く感銘を受けたとしよう。ところが、その感動の経験がいかにその人にとって重要な真実であったとしても、この出会いは科学の対象にはなり得ない。なぜなら、科学の対象とするためには、感銘を受けるような出会いを前もって予測し、その人の反応について各種の測定を行い、師と出会う前後の反応を比較することが可能でなければならない。さらに、その人にとっても、他者にとっても、同じ条件で出会いを繰り返したときに同じ反応が再現できなければならない。しかし、ここで問題にしているのは、そのような予測ができず、繰り返すこともできず、その人とその師ならではあり得ないからこそ生じた、一生に一度の感動的な邂逅という出来事なのであるから、これらの制約を満たすことは実際にはほとんど不可能であるといえる。このような意味で、出会いの「心」を科学の対象とすることはできない。

一方で、優れた作家なら、このすばらしい出会いの感動を上手に表現できるだろう。場合によっては、実際に体験したとき以上の感動を与えることすら可能であろう。そして、その作品を読んだ多くの人々の情緒に大きな影響をもたらすことであろう。このような感動的な個人の実体験や文学上の経験と、科学の対象とする経験とはどこが違うのであろうか。

* * *

日常あるいは文学上用いられる「経験」という言葉は、我々が五感を通じて得た、あるいは自分で行った試みから得た知識のうち、深い印象を残した私的体験を意味することが多いのに対し、科学でいう経験的事実は、万人に観測(観察)可能な、公共客観性のある事実を指す。文学が多くの人の情緒に影響を与えるとは言っても、それは万人にとって等しく真実であるとは言えず、むしろ、出会い

と同様に受け取る人によって受ける印象が異なることに意味があると言ええる。それに対して科学では万人に等しく真実であることが重要であり、出会いの心が科学で扱う経験的事実にはなり得ない一方で、我々の五感では直接捉えられないものでも、適当な観測手段さえあれば科学の対象となりうる。

たとえば、我々の視覚では赤外線を捉えることはできないが、赤外線カメラとブラウン管を用いて赤外線を可視光線に変換し、我々の視覚で捉えられるようにすれば赤外線を観測することが可能となる。また、我々の聴覚では超音波を聞くことはできないが、これをいったんマイクロフォンで電気信号に変換して録音し、再生するとき再生速度を落とすことで周波数を下げ、可聴域内の音にしてしまえば我々の聴覚で聞くことができる。あるいは、電気信号になった超音波の波形をコンピュータに取り込み、画面にグラフ表示して視覚的に観測することもできる。このように、我々の五感で直接捉えることはできなくとも、適当な観測手段によってその存在や変化の様子を客観的に知ることが可能であれば、科学の対象になる。

要するに、科学にとっては、特定の個人にとってもっともらしく思えたとか、大きな印象を与えたとかいう、私的な経験としての衝撃の強さが重要なのではなく、万人にとって観測（観察）可能であるということと、公共客観性があるということが重要であり、これこそが経験的事実を重視する理由なのである。そしてそれゆえに、日常では「心」と呼ばれるものの中で、科学である心理学の対象にはなり得ない部分が生じるのである。

では、心理学が「心」のすべてを扱えないのなら、他にもっと良い方法があるのではないかと考えるかも知れない。その答えは、何を目的とするかによって変わってくる。もし、他の人には全く理解できなくてもよいから自分にとって納得のいく答えを得たいというのであれば、なにも心理学を勉強する必要はない。そういう人は何らかの方法で自分の信念を形成し、社会的規範に反しない範囲でそれ

にしたがって行動すればよい。ただし、人はそれを宗教と呼ぶかも知れない。また、「信心過ぎて極楽を通り越す」危険もある。しかし、他の人も（その人の信念とは無関係に）理解できる一般的法則を知りたい、おおざっぱな近似ではあっても「ほんとうの」あるいは「確実な」ことを知りたいというのであれば、科学的方法による他はない。少なくとも、これまでにそれ以外の方法でこのような目的を達した方法は知られていない。

「科学的方法では、近似的な答えしかわからないからいやだ」という人がいる。しかし、それは間違っている。近似の精度は新しい知識の積み上げによって向上させることができる。そして、その出発点としては、もっともおおざっぱな、しかしそれゆえ本質的なところから始めなければならない。おおざっぱな説明すらうまく行かないようでは、より厳密な説明が成功するわけがない。「大まかに正しい」ということと、「でたらめ」や「一見精緻だが、根本的な間違いがある」ということの間には雲泥の差がある。夢の解釈の例のように間違っただけの上で間違っただけを積み重ねて行くのは全く無意味である。それよりも、確実な知識をその限界とともに知ることの方が、結局は無駄にならない。

3. 心理学的研究の 4 段階

さて、それではどのようにして心理学の研究は進められ、その精度を高められていくのだろうか。ここでは、その説明をしよう。

心理学的研究を、次のような段階に分けることができる。それは、記述 (description)、予測 (prediction)、統制 (control)、説明 (explanation) の 4 段階である。

3-1 記述

まず最初に、何を問題とするかを明確に記述しなければならない。すなわち、何を知り

たいのか、何がまだ明らかにされていないのかを言語で表現しなければならない。そのためには観察によって対象のおおまかな記述を得たり、今までにどこまでが明らかにされているかを、文献調査によって調べ記述することも必要になる。また、問題を明確に表現するためには漠然とした考えを整理し、なるべく本質的で具体的な形で考えねばならない。

3-2 予測

つぎに、今までに知られている事実から予測されることは何かを考える。すなわち、仮説 (hypothesis) を立てる。仮説とは、ある現象についての特定の検証可能な (testable) 予測をさす。そして、検証可能とは経験的事実によってその仮説が支持されるか、されないかを明らかにできることである〔特に、間違っているという証拠を示しうることを、反証可能性 (falsifiability) があるという〕。では、次のものは仮説といえるだろうか。

- (a) 人が他の人の名前をいい間違えるときは、本人は意識していなくてもその人を嫌っている。
- (b) 人が成人してから他の人とうまくやっていけないのは、本人が覚えていない幼少時の心的経験に問題があったからである。
- (c) 人は睡眠が不足しているときほど他の人の名前をいい間違えやすい。

(a) は仮説ではない。なぜなら、本人が他の人を実際に嫌っているようがいまいが、人の名前をいい間違えさえすれば、その人を嫌っていると主張するのだから。すなわち予測をしておらず、単なる自分勝手な主張をしているに過ぎない。

(b) も仮説ではない。本人が覚えていない幼少時の心的経験を経験的事実として取り出すことができないからである。すなわち、検証不可能である。

(c) は仮説だといえる。この仮説を確かめるには、睡眠不足の度合いと人の名前をいい間違える率をそれぞれ測定し、それらの間の関

係を調べればよい。つまり、この仮説は睡眠不足の度合いと名前をいい間違える率という二つの変数 (variables) の間の関数関係 (function) を予測しているのだから、どのような関数関係が成立しているかを実際に調べればよい。そして、その結果いかんによって仮説を支持するか、しないかを決定できる。

それでは、睡眠不足の度合いをどのようにして測定すればよいのだろうか。

そのためには、まず睡眠不足の意味を明らかにしなければならない。実験者や被験者によって睡眠不足の意味の定義が異なれば、測定の再現可能性が損なわれてしまうからである。

そこで、変数の操作的定義 (operational definition) ということが必要になる。操作的定義とは、変数を測定するのに用いた操作 (operation) あるいは方法を述べることで変数の意味を定義することである。これによって、異なる実験者間、被験者間でも再現性のある測定が可能になる。たとえば、ある人の1日の睡眠時間を1ヶ月にわたって調べて平均を取り、それとの差でその人の睡眠不足の程度を定義することができる。すなわち、平均の睡眠時間を H_M 、いい間違えの測定をする直前の睡眠時間を H_B とすれば、両者の差 H_D を、

$$H_D = H_B - H_M$$

と定義できる。 H_D は平均よりも睡眠時間が短ければ負の値を、長ければ正の値をとる。もう一方の変数、すなわち他の人の名前をいい間違えた率の測定にも操作的定義が必要である。どのように定義するのがよいか、読者自身で考えてみて欲しい。

仮に、数十人の被験者について睡眠不足の程度と他の人の名前をいい間違えた率とを調べ、その関係が図2-1(a)のようであったとすれば仮説は支持されたことになる。一般に、この図のような2変数の関係(傾向)を「負の相関 (negative correlation) がある」という。では、図2-1(b), (c)のような場合は仮説は支

持されるだろうか。

いずれの場合も、仮説は支持されない。図 2-1(b) のような関係は「無相関 (no correlation)」と呼ばれる。この図は、2 変数の間に全く規則的な関係が見られないことを示している。図 2-1(c) のような場合 (「正の相関 (positive correlation)」) は、2 変数の間には規則的な関係が見られるが、一方の変数の増減に対する他方の変数の増減の方向が、仮説とは反対方向である。

ところで、二つの変数の間に相関があれば、いつでも一方が他方の原因であるといえるだろうか。

そうはいえない。確かに、無相関な 2 変数の間には因果関係 (cause-and-effect relationship) は存在し得ない。逆に、実際に二つの変数の間に因果関係があったとすれば、常にその 2 変数の間には相関が見られることになる。すなわち、相関する 2 変数の間には因果関係が存在する「可能性がある」ことになる。しかし、2 変数の間に相関が見られたからといって、必ずしも因果関係があるとは限らない。また、どちらの変数が原因であり、結果であるかをいうこともできない。

たとえば、仮説が「皮膚に刺激を与えたときの反応が遅いほど、名前のいい間違えが増える」であったとしよう。そして、実際には睡眠不足や薬物の投与、外界からの刺激の減少などによる脳の覚醒度の低下がすべての原因であったとしよう。一般に、脳の覚醒度が低下すれば反応が遅くなり間違いも増えるから、この場合も 2 変数の間に相関が見られることになる。しかし、「皮膚刺激に対する反応が遅いことがいい間違えの原因である」とも、「いい間違えが増えることが皮膚刺激に対する反応が遅れる原因である」ともいえない。

このように、相関だけに頼っていたのでは因果関係を明らかにできない。それではどうすればよいのだろうか。

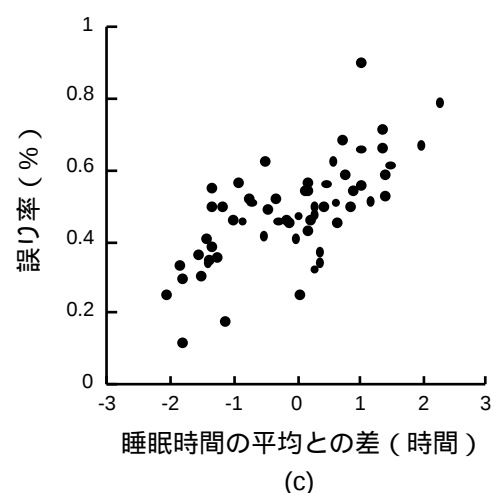
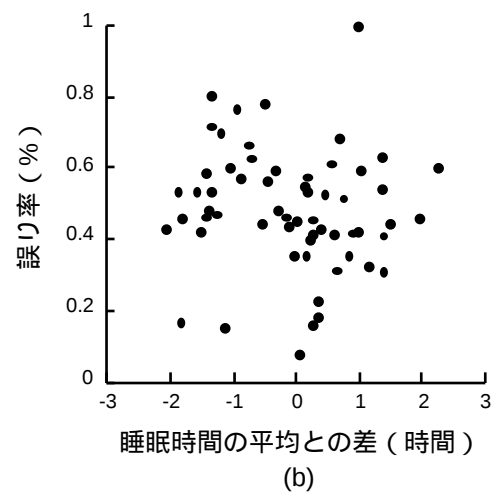
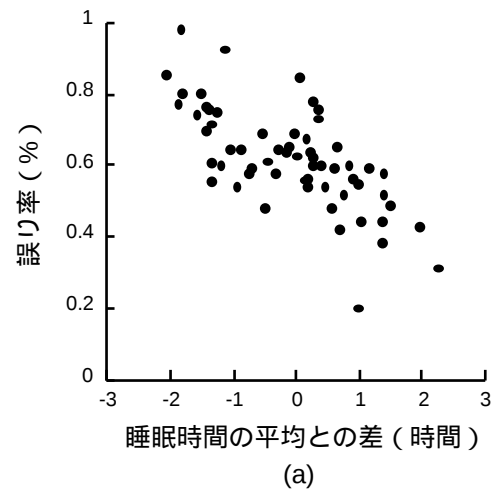


図 2-1 2 変数の相関関係を示す散布図 (scattergram)。データは説明のための架空のもの。(a) 負の相関、(b) 無相関、(c) 正の相関。

3-3 統制

関連のある 2 変数の間に因果関係があるかどうかを明らかにするためには、要因の統制を行わなければならない。すなわち、どの要因が結果に影響するのかを明らかにするため、影響を明らかにしたい要因だけを操作し、それとは無関係な要因が変化しないよう一定に保たねばならない。たとえば、人の名前のいい間違えの原因が脳の覚醒度にあるのかどうかを知りたいければ、被験者の脳の覚醒度を何らかの方法で系統的に変化させ（たとえば、規則正しい生活をしている被験者を用いて、いい間違えの頻度を測定する時刻を系統的に操作する）、それ以外の要因で結果に影響する可能性のあるすべての要因、すなわち、被験者の年齢、性別、知能、課題の難易度などを一定に保つ必要がある。このように、一つの変数を操作し、別の変数への影響を観察する研究のことを、統制された研究 (controlled research) と呼ぶ。統制された研究を行うためには、実験的手法が用いられるのが普通である。

3-4 説明

因果関係がはっきりすれば、現象の生じる理由を説明できるようになる。現象の生じる理由を説明し、現象を予測し、統制する原理をまとめたものを理論 (theory) と呼ぶ。理論は、その時点までのデータに基づいてつくられた当座の説明であり、まだ証明されていない事柄をも包括する原理であるので、その正当性についてはさらに科学的な評価を必要とする。まだ証明されていない事柄について述べているという意味で、理論は思想と言い換えることもできる。思想は、体系内での矛盾が生じない限り経験的事実とは無関係に存在しうる。したがって、理論の科学的な評価をするためには、理論そのものではなく、そこから仮説 (モデル) を導き、検証可能な形にしたものを評価しなくてはならない。

新たな検証によって仮説が支持されれば、それを導き出した理論は説明として生き延び

るし、仮説が支持されなければ、理論は改良されるか、もしくは捨て去られる。このようにして、問題の記述、予測から理論構築までのプロセスは無限に繰り返され、科学的説明の精度は次第に向上していく。

このような過程を経て十分に確立された説明は、法則 (law) と呼ばれる。なるべく多くの現象を説明できる、より一般的な法則を獲得することが科学の目的である。

4. 心理学の研究方法与科学性

心理学で用いられる研究方法 (経験的事実を収集する方法) は、(1) 調査 (survey)、(2) 事例研究 (case study)、(3) 自然観察 (naturalistic observation)、(4) 実験 (experiment) に大きく分かれる。これらのうち、どの方法を採用するかによって、得られた結果の科学的な価値が異なる。

4-1 調査

調査のなかでもよく用いられるのがアンケート調査である。これは、あらかじめ決められた質問事項にしたがい、面接や質問紙による被験者本人の記述に基づいて、その人の行動や態度、信念、意見、意図について知ろうとするものである。

この方法によれば、比較的簡単に大量のデータを集めることができる。では、この方法の問題点にはどのようなことが考えられるだろうか。

* * *

問題点はいくつもある。たとえば、調査者が意図したとおりに被験者が質問を理解したかどうかはわからない。被験者に答えを選択肢で選ばせる場合には、どのような選択肢を用意するかによって反応がゆがめられる可能性もある。また、被験者が自分の本心を答えたのか、嘘をついたのか、それとも期待され

そんな答えを述べたのか、調査結果からはわからない。現代では、性や差別あるいは所得や年齢など、倫理的、道徳的な問題や自尊心、虚栄心に関わる質問には被験者が本心を答えない可能性が高くなる。さらに、たとえ被験者が本心を答えたとしても、それは所詮、被験者自身が自覚した範囲、内容で自分について語ったに過ぎず、その人の客観的な記述である保証はない。過去の記憶は変容していることも多いし、勘違いや、忘れてしまっただけで済んで答えるということすらある。

また、結果はサンプルの取り方、すなわちどのような母集団からどのようにして被験者を選んだかによって大きく左右される。たとえば、ファッション雑誌のなかにアンケート用のはがきを綴じ込み、読者から返送された回答をもとにファッションの流行色を調査したとしよう。この調査結果にはどのような「偏り」が入り込んでいいると考えられるだろうか。

* * *

まず、雑誌を手にする人は全体のなかの限られた集団でしかない。そのうえ、雑誌にはそれぞれ読者層というものがあり、10代の読者をねらって作られた雑誌と中年の読者をねらって作られた雑誌とでは、読者層はほとんど重ならない。さらに、年齢層が同じであっても人の価値観（何に興味を引かれるか）は様々である。たとえばシックな服装を好む人、カジュアルな服装を好む人といった違いがある。そして、それぞれの雑誌は特定の価値観を持つ読者をターゲットにして作られている。さらに、特定の雑誌の読者のうち、質問に興味のない人、興味はあっても面倒くさがりの人、自分の意見を表に出さない傾向のある人などは回答しない。それゆえ、アンケートのはがきに回答する人は、その雑誌の読者のなかでも特定の行動パターンを持つ、偏った意見の持ち主の集団ということになる。したがって、この調査結果は全体の傾向を代表したものにならない。

一方で、サンプリングの偏りをなくすことは、母集団が大きくなればなるほど困難になる。世界のファッションの流行色を調べるためには、世界の人々全体を対象にして、偏り

のない調査をしなければならない。しかし、世界中の人々のなかから公平に被験者を選び、確実にすべての人から回答をもらう現実的な方法があるだろうか。

アンケート調査が信頼できない理由の一つは、言葉では真実がなかなか明らかにできないことである。人間は真実も語るが同様に上手に嘘をつく。また、自分では嘘と自覚せずに話している場合さえある。その点、行動で嘘をつくことは難しい。さらに、日常の行動が嘘であるとしたら何が真実が解らなくなる。それゆえ、我々は人間の言葉を聞くよりもその行動を観察しようとする。

一つの例を挙げよう。筆者の一人が医学部に勤務していた丁度 1975 年頃になると、煙草が身体に有害であることは、科学的に否定できなくなってきた。そのとき、同僚の医師達は、一斉に禁煙を始めた。患者に煙草を止めるように指示する以上、自分たちが喫煙を続けているわけには行かないと言うのだ。老年になって、今更禁煙の出来ない医師は、肩身の狭い思いをしながら自分で休憩時間を作って別室でこっそりと喫煙していた。このような姿を見て、世間の評価と異なり、医師への信頼が増したのも事実である。

現在では、喫煙の害は喫煙者自身だけでなく周囲にいる間接喫煙者にも重大であることが明らかとなっている。今更、医師の喫煙者が増えないわけである。ところが不思議なのは、他人の幸福を厳しく追及する社会福祉関係の人に喫煙者が目立つことである。他人の健康に危害を与えながら説く福祉は何ら信頼に足るものでないと思えるべきだろう。これが人間を理解しようとするにあたって、言語に頼るよりも行動観察による方が望ましいと考える理由である。

一般に、アンケート調査による研究結果は、あまり公共客観性の高くない極めておおざっぱなものと考えべきで、いくら数値化された結果が出ていてもその数字をそのまま信用はできないことに留意する必要がある。

4-2 事例研究

事例研究とは、特定の個人、グループ、状況の現象を集中的に調べることをさす。複雑でまれな現象を調べるのに用いられる。たとえば、脳の損傷部位と行動の障害との関係を調べるような臨床的研究で用いられることが多い。

しかし、特定の事例のみを調べる以上、得られた知識をどこまで一般化できるかが問題になる。すなわち、たまたま選り出され、調べられた事例が、全体を代表するような典型的な事例であるという保証がない。言い換えれば再現可能性が弱い。特に末梢的でない、中枢およびその機能に依存した心的な過程になるほど事例ごとの差が大きくなると考えられる。したがって、この方法で得られた知識は統制された研究を行うきっかけとしての役割は果たせるが、それ自体で一般的な結論を導くことはむづかしい。

4-3 自然観察

自然観察は、自然な状態での生体の行動を観察する方法である。この方法は、動物行動学（比較行動学）(ethology) で用いられ、自然な状況下での下等動物の行動を決定する要因を明らかにすることに成功した。これは、下等動物の行動パタンの大部分は遺伝子によるプログラムによって決定され、環境条件が整えば自動的に行動が発現する場合が多いためと考えられる。

しかし、行動はことばよりは信頼できるものの（4-1 参照）、人間を含めた高等動物の複雑な行動を観察する場合にはこの方法は問題が多い。まず、観察する側の人間の問題がある。すなわち、人間にとって観察とは常に選択的に自分の期待に添う形でなされるものなので、同時に取り入れることが可能な多数の情報のなかから、結局は自分にとって興味のあるものだけを取り込むことになってしまう。そのうえ、観察者の「期待」は観察の結果そのものを観察者の都合のいいようにゆがめてしまうことすらある。つまり、決して複雑な現象を「ありのまま」に客観的に観察することなどできない。

さらに、人間を観察する場合には観察対象の人間が観察されることによって行動を変えようという問題が起こる。すなわち、観察者の存在が観察対象の人間に知られた時点で「自然」観察ではなくなってしまう。

このように、自然観察も公共客観性の点で大きな問題がある。

4-4 実験

実験とは、特定の変数（独立変数 independent variable）を操作し、他の変数（従属変数 dependent variable）への影響を観測できる状況をさす。たとえば、二つの音を引き続いて聞かせ、先行する音の長さや強さを変化させたときに、後続する音の長さの知覚がどのような影響を受けるかを調べた実験がある (Ueda and Ohtsuki, 1996)。先行音の物理的な長さは二種類あり、それぞれについて音の強さを変化させて実験が行われた。この実験の独立変数は先行音の物理的な長さや強さであり、従属変数は後続音の知覚的な長さの変化である。

では、一般に実験で測定された従属変数の値そのものから、直ちに結論が導き出せるだろうか。

* * *

否。従属変数の値そのものから直ちに結論を導くことはできない。なぜなら、従属変数の値には、独立変数だけではなく、測定を繰り返すごとに生じる被験者の反応の変動、測定の誤差などの統制されない（できない）因子 [ランダム変数 (random variable)] も影響を与えているからである。

しかし、統計学 (statistics) の知識を用いることでこの問題を解決できる。すなわち、無限に実験を繰り返したとしたらこれらの変動の大きさがどれぐらいになるかを、有限な回数の測定の繰り返しによって得られた変動の大きさから確率的に推定することができる。そして、得られた従属変数の変化が誤差変動によって偶然に生じたものと考えられるべきか、そうではないのかを一定の基準に従って決定でき、その結論にはどの程度の確信を持てるのかを知ることができる。つまり、統計的検

定 (statistical test) によって実験結果の再現性の有無を推測することができる。得られた従属変数の変化が統計上信頼できるとき、その変化は統計的に有意 (statistically significant) であるという。結果に再現性があることは科学の重要な要件の一つであるので、統計的に有意でない数値上の差は科学研究においては価値を持たない。

実験によっては、被験者間の個人差 (individual differences) が顕著に現れる場合もある。個人差には偶然的な要因に加えて各個人の遺伝的 (genetic) 要因と環境的 (environmental) 要因の両方が関与していると考えられる。しかし、これらの要因を分離し統制することが一般に困難であるので、個人差はランダム変数とみなして処理してしまうことも多い。具体的には被験者間のデータを平均してしまうか、従属変数の変動から被験者間の変動と実験条件間の変動とを分離して、純粋に実験条件による変化だけを見ろといった方法が採られる。一方、個人差を意味のあるものと考え、その生ずる理由を (部分的にせよ) 説明しようとする場合もある。そして実際、個人差の現れ方に法則性が見いだされる場合もある [たとえば、Ueda and Ohgushi (1987)]。しかし、常に法則性が見いだされるとは限らない。ただ単に各個人のバラバラなデータを記述するだけであれば、その研究は事例研究の様相を帯びてくる。

さて、これまでに述べた研究方法のなかで、法則を確立するのに直接必要な方法はどれだろうか。

* * *

法則を確立するには因果関係を明らかにしなければならないので、実験が必要となる。それ以外の方法では因果関係を直接明らかにすることはできない。

4-3 で述べた自然観察を是とする立場からは、実験は人工的な状況を作っているという批判がある。しかし、たとえ人工的であっても不自然さを減らす工夫は可能である。そして何よりも、条件がはっきりしているので再現可能性が保証され、結果をどこまで一般化できるかを明らかにできる。実験結果の一

般性を制限している条件が明確なので、逆に、より一般性の高い結果を得るための道が常に開かれているのである。それに対して、自然観察では全く同じ状況を再現することは不可能であり、結果を一般化できる限界は明らかではなく、研究の積み重ねによる研究方法の改良は困難である。

このように実験は因果関係を確かめるもっとも科学的な方法である。それ以外の方法は実験による研究を始めるための手がかりとしては利用できるが、因果関係について決定的な結論を得ることはできない。そして、実験の方法論を学んだ者が、限界をわきまえた上で実験以外の方法を利用することは可能であるが、その逆は極めて危険である。

5. 心理測定と心理検査

5-1 心理測定

精神物理学による、感覚や反応時間などの測定に始まった心理測定は、ビネーによる知能尺度の完成によって、精神現象を測定することに最初に成功した。この検査は、後にアメリカに渡り、ターマンによるスタンホード・ビネー検査として世界に広まった。人間の持つ精神現象の中でも最上位の機能だと考えられてきた知的機能の測定に成功したため、精神機能はすべて心理測定の対象とすることが出来ると考えられ、ビネーの方法を模倣して性格検査や適性検査など数多くの心理検査が作成され、使用されるようになっていった。高度な精神現象を測定することに最初に成功したのが、知能尺度という一つの明確な次元の上に立った尺度の作成に起因したことが重要である。

5-2 心理検査

心理検査の基礎を作ったビネーの考えについて少し詳しく述べておこう。ビネーは、数

多くの子ども達について多くの検査項目を試行し、年齢による解答様式の変化を調べることによって、年齢の増加によって順調に増加する知能年齢尺度を作成した。このような尺度の作成が検査を成功させた要因である。さらに、作成した尺度について現在の統計学では、信頼性（再検査信頼性）と妥当性（現実的妥当性）と呼ばれる二つの基準で検査尺度の有効性を確かめた。信頼性と妥当性が確かめられたことによって、知能尺度は心理検査として確実なものとなったのである。

人間の持っている精神的な機能の中でも、最も高度なものと考えられてきた知的機能の測定に成功したことは、情緒機能など他の精神機能の測定も出来ることが保証されたと考えられた。そのため、同様な手続きで、性格検査等多くの心理検査が作成されてきた。そのような心理検査は、現実の臨床場面等で頻繁に使用されている。しかし、厳密に言えば、現在、性格検査で現実的妥当性が確かめられている検査はない。それどころか臨床的に最もよく使用されている、ロールシャッハ検査についてはアイゼンクによって妥当性に疑問があることが示されているにも関わらず、臨床的使用だけが進められ、アイゼンクへの反論も、妥当性の検討も無視されているのが現状である。性格を測定する一次元的尺度が完成していないため、性格検査は、科学の中に持ち込まれた疑似科学の様相を示していると言わざるを得ない。

なお、週刊誌などマスコミで使用されている心理検査は、妥当性どころか信頼性も検討されていないし、それどころか標準化の手続きさえ踏んでいない全くの非科学的な代物であり、お神籤のたぐいである。血液型の性格判定も信頼性（統計的用語であり、同じ人についていつでも同じ血液型が得られるということであり、その結果が信用できるということではない）だけは非常に高いものの、戦時中、軍事目的により各国の研究所による大規模な研究の結果、妥当性が否定されたものであり無意味なものであることに変わりはない。

6. 社会福祉と心理学

社会福祉の現場で利用されている心理学は、心理検査と臨床心理学の知識であろう。狭義の社会福祉と心理学の、現在の関係について最後にまとめておこう。

6-1 心理判定員

心理学の専門家にとって法律によって認められた専門職は、おそらく児童相談所に設置が義務づけられた心理判定員であろう。これは、戦後、児童福祉法（昭和22年）が制定されたとき、児童福祉の中心となる機関として全国都道府県に児童相談所が設置義務づけられたことに始まる。児童相談所の所長の資格として記載されたのが、職務経験による資格を除くと、医師と心理学を専攻して大学を卒業したものである。現在では、心理判定員と呼ばれ、おおむね心理学を専攻し大学院（修士課程）を修了したものが各地の児童相談所に配属されるようになってきた。医師は国家資格であり、児童福祉法の規定は特に関係しないが、心理学の専門家には現在でも国家資格はなく、心理判定員の制度はその活動内容として参考になる。

6-2 心理検査の使用倫理

心理検査については、項目をたてて説明したので、その使用倫理について付け加えておく。日本は公的規制が多い国だと言われるのに反して、薬局へ行けば誰でもたいていの薬が買えるように、商売の自由度が非常に大きく管理がずさんであることも良く知られている。開店の自由度は低いが商売の内容には自由度が高い。心理検査についても全く同じで書店に行けば誰にでも、どの様な検査でもほぼ自由に購入して使用することが出来る。日本はアメリカと共に心理検査が多く使用され

ていることで世界的に有名であるが、アメリカでは心理検査の使用が日本のように自由ではない。心理検査の使用はAPA（アメリカ心理学会）の規定によっているのだが、簡単に一部を説明すると、日本では親や塾の先生でも自由に使用している標準化された学力検査でさえも、標準化作業の行われたものはアメリカでは初歩的な心理検査と規定され学校長など代表者の公的な誓約書がないと使用できない。性格検査や知能検査と名が付けば心理検査の使用に資格を持った心理学の専門家と医師以外には使用も購入も許されない。アメリカでは、臨床的な心理検査は、その検査を専門とする心理学や医学の専門家によって使用されるのである。また、臨床心理学は精神分析家とは異なった教育体系によって養成され、組織も資格も別の専門職であることも付け加えておく必要があるだろう。筆者の知る限り、薬と心理検査については日本ほど勝手な使用が野放しにされ、一方、その弊害について問題にするところはない。厳格な使用をして初めて弊害を論ずることが出来よう。

6-3 臨床心理学

次に臨床心理学についても簡単に説明しておこう。臨床心理学は、言うまでもなく心理学を基礎とした応用心理学の一つである。主要な目的は、何らかの行動の障害に対して、援助し回復を目指すと言えよう。そうすると臨床心理学が学として確立されるためには、対象とする行動の障害に対しての診断体系が必要であり、診断体系に対応した治療体系が必要になる。しかし、既に述べたように基礎となるべき心理学そのものが、まだ未熟な科学であり、臨床心理学の現状では、行動の異常については主として精神医学が形成してきた診断の体系を準用しているに過ぎなく、科学の要件を十分に満たしているとは言い難い。行動療法などの心理療法については、学習理論などを基礎とした経験を積み重ねてきたが、もちろん、まだまだ未完成で不十分なものと自覚せざるを得ない。このような臨床心理学を学ぶためには、既に述べたように基礎とな

る心理学（知覚心理学・学習心理学・生理心理学・発達心理学・社会心理学等）について十分な基礎知識が必要であることは当然である。社会福祉の活動は、各種の専門職間の連携が重要な分野であり、心理的な異常や行動の異常は医師や臨床心理学の専門家が対処すべきことであり、他の職種の人が直接対処すべきものではない。

6-4 宗教と科学

最後に、心の悩みなど精神の問題は、すべてを科学が対処しなければならないわけではない。宗教活動にも、自分たちの都合だけの金儲けを主要な目的とした多くのインチキ宗教が混在するが、宗教は、ヒトの精神的な悩みを救済するために発生したということもできる。そのような意味で、宗教の役割は今後も続くであろうし、精神の救済にとっての宗教の存在と宗教的な救済を否定するのではない。ただ、宗教と科学はどこまでも厳格に区別されなければならない。

7. 将来の福祉社会のために

この章では、心理学の立場と方法について詳しく説明してきた。終わりに当たって、心理学を学ぶものとして、福祉社会のあり方について少し考えておきたい。心理学が対象とする、個人のヒトにとって福祉とは何かと考えたとき、究極的には、ヒトの幸福の問題に行き着く。要するに、すべてのヒトが幸福な生活を送ることの出来る社会の建設と言い換えても良い。ヒトが幸福に生活するための社会制度の建設や、施策の決定はある程度可能かもしれない、しかし、心理的な意味で本当のヒトの幸せを考えると、答えは単純ではない。見かけは同じ状態が、あるヒトにとっては幸福であり、他のヒトにとってはきわめて不幸な状態であることもしばしば存在する。そうして、個人の人間にとって、究極的には心理

的な幸福感がないと幸せとは言えない。科学は、価値観を離れることによって学問的進歩を獲得してきた。その構図は今後変えることが困難であろう。一方、究極的に、福祉はまさに価値観と直接対面せざるを得ない領域である。ここに、福祉を学問の対象としようとするときの本質的な矛盾が潜んでいる。これこそ、将来に架せられた課題であることを記しておくことでこの章を終わろう。

読書指針

【科学と疑似科学】

- アイゼンク, H. J. (1988). 精神分析に別れを告げよう——フロイト帝国の衰退と没落——, 宮内勝 他訳 (批評社, 東京)。
 ファインマン, R. P. (1998). 科学は不確かだ!, 大貫昌子訳 (岩波書店, 東京)。
 ハインズ, T. (1995a). ハインズ博士「超科学」をきる——真の科学とニセの科学を分けるもの, 井山弘幸訳 (化学同人, 京都)。
 ハインズ, T. (1995b). ハインズ博士「超科学」をきる Part II——臨死体験から信仰療法まで, 井山弘幸訳 (化学同人, 京都)。
 セーガン, C. (1997). カール・セーガン, 科学と悪霊を語る, 青木薫訳 (新潮社, 東京)。

【科学的方法について】

- 浅田彰 他 (1986). 科学的方法とは何か, 中公新書 814 (中央公論社, 東京)。
 中谷宇吉郎 (1958). 科学の方法, 岩波新書 (青版) 313 (岩波書店, 東京)。
 ラモン＝イ＝カハール (1980). 若き科学者へ——忠告と助言, 嶋稔、荻野勤治 共訳 (三省堂, 東京)。

【心理学：概論書】

- アイゼンク, H. J., ウィルソン, G. D. (1984). 心理学概論, 塩見邦雄 監訳 (創元社, 東京)。

【心理学：上級概論書】

- グロス, R. D. (1993). キースタディーズ 心

理学 (上・下), 大山正, 岡本栄一 監訳 (新曜社, 東京)。

- Solso, A. L., Johnson, H. H., & Beal, M. K. (1998). *Experimental Psychology: A Case Approach*. (sixth ed.), (Longman, New York).

【統計学】

- 大村 平 (1969). 統計のはなし (日科技連, 東京)。
 ハフ, D. (1968). 統計でウソをつく法: 数式を使わない統計学入門, 高木秀玄 訳, ブルーバック B120 (講談社, 東京)。
 ラオ, C. R. (1993). 統計学とは何か——偶然を生かす, 藤越康祝, 柳井晴夫, 田栗正章 共訳 (丸善, 東京)。
 ロウントリー, D. (1991). 涙なしの統計学, 加納悟 訳 (新世社, 東京)。
 スネデカー, G. W., コ克蘭, W. G. (1972). 統計的方法——原書第6版, 畑村又好, 奥野忠一, 津村義郎 共訳 (岩波書店, 東京)。

文献

[1. 福祉社会と心理学]

- Eysenck, H. J. (1985). *The decline and fall of the Freudian empire*. (Pelican, London). [アイゼンク, H. J. (1988). 精神分析に別れを告げよう——フロイト帝国の衰退と没落——, 宮内勝 他訳 (批評社, 東京).]
 Hines, T. (1988). *Pseudoscience and the paranormal: A critical examination of the evidence* (Prometheus Books, New York). [ハインズ, T. (1995a). ハインズ博士「超科学」をきる——真の科学とニセの科学を分けるもの, 井山弘幸訳 (化学同人, 京都); ハインズ, T. (1995b). ハインズ博士「超科学」をきる Part II——臨死体験から信仰療法まで, 井山弘幸訳 (化学同人, 京都).]

[2. 心理学におけるヒトの見方]

- Baillargeon, R. (1987a). "Object permanence in 3 1/2 and 4 1/2 month old human infants," *Developmental Psychology*, 23, 655-664.
 Baillargeon, R. (1987b). "Young infants' reasoning

- about the physical and spatial properties of a hidden object," *Cognitive Development*, 2, 179-200.
- Eysenck, H. J. (1985). *The decline and fall of the Freudian empire*. (Pelican, London). [アイゼンク, H. J. (1988). 精神分析に別れを告げよう——フロイト帝国の衰退と没落——, 宮内勝 他訳 (批評社, 東京).]
- Freud, S. (1900). *The Interpretation of Dreams*. (Allen and Unwin, London). [フロイト (1968). 夢判断 (フロイト著作集 2) 高橋義孝訳 (人文書院、京都)].
- Garcia, J., Ervin, F. R., and Koelling, R. (1966). "Learning with prolonged delay of reinforcement," *Psychonomic Science*, 5, 121-2.
- Hines, T. (1988). *Pseudoscience and the paranormal: A critical examination of the evidence* (Prometheus Books, New York). [ハインズ, T. (1995a). ハインズ博士「超科学」をきる——真の科学とニセの科学を分けるもの、井山弘幸訳 (化学同人、京都) ; ハインズ, T. (1995b). ハインズ博士「超科学」をきる Part II——臨死体験から信仰療法まで、井山弘幸訳 (化学同人、京都).]
- Hartmann, W. M., and Doty, S. L. (1996). "On the pitches of the components of a complex tone," *Journal of the Acoustical Society of America*, 99, 567-578.
- Hobson, J. A. (1995). "Sleep and dreaming," in *Biological Aspects of Behaviour*, edited by D. Kimble, and A. M. Colman, Chap. 4, 68-91 (Longman, London).
- 中谷宇吉郎 (1958). 科学の方法, 岩波新書 (青版) 313 (岩波書店, 東京).
- Sperry, R. W. (1968). "Hemisphere deconnection and unity in conscious awareness," *American Psychologist*, 23, 723-33.
- 吉野弘 (1992). 贈るうた (花神社、東京).
- Wong, E. (1996). "An economic case for basic research," *Nature*, 381, 187-188.
- 1193-1200.
- Ueda, K., and Ohtsuki, M. (1996). "The effect of sound pressure level difference on filled duration extension," *Journal of the Acoustical Society of Japan* (E), 17, 159-161.

[4. 心理学の研究方法与科学性]

- Ueda, K., and Ohgushi, K. (1987). "Perceptual components of pitch: spatial representation using a multidimensional scaling technique," *Journal of the Acoustical Society of America*, 82,